



交響曲第4番を演奏するN響

## シヨスタコーヴィチの心の声 ポーガ指揮4番と下野竜也指揮10番

5月は優れたシヨスタコーヴィチ演奏が続いた。交響曲第4番を取り上げたのは、アンドリス・ポーガ指揮NHK交響楽団（5月30日、NHKホ



交響曲第4番を指揮するアンドリス・ポーガ（提供：NHK交響楽団）

ール）。下野竜也指揮名古屋フィルは、交響曲第10番を精緻に演奏し、作品の魂を如実に伝えた（5月29日、日本特殊陶業市民会館）。シヨスタコーヴィチが第4番を書いたのは、29〜30歳。第4番から第5番、そして47〜48歳の第10番へと、シヨスタコーヴィチの内面はどう変わっていったか。それぞれの作品には、作曲者の心の声が含まれている。

### 5番を結ぶチェレスタ、ハーブ

N響定期の舞台を見て、1936年の時点で初演が見送られた第4番と、翌37年に作曲・初演された第5番をつなぐ楽器の存在に思いが及ぶ。それは、チェレスタと2台のハーブである。第4番は、チェレスタが上行

音型をゆっくり繰り返し、最後は謎をかけるように、あるいは疑問と「否」の声を上げるように、不調和の音を奏でて終わる。

共産党機関紙「プラウダ」に自作を批判され、社会では「大テロル」が進み、市民も党幹部も、軍幹部も秘密警察に逮捕されていく。第4番は、権力をあざ笑うような不敵な作品だった。

第1楽章と第3楽章の曲想が目まぐるしく変転する。ゲルギエフはインタビュでカレイドスコープ（万華鏡）と呼んだが、とりわけ第1楽章は難解な印象を生み、第3楽章は

一転してサーカスのような、人を小ばかにしているほどの表情の変化をみせる。この曲は社会主義への恭順を要求する党権力への露骨な反抗であっただろう。ポーガ指揮N響は、遅めのテンポで生真面目なほどに楽譜を忠実に再現する。

### 砕け、暗黒に沈む世界

道化じみた終楽章の第3楽章は、終結に向かい一転する。マーラーの交響曲第5番を思わせるコラール風旋律が現れたかと思うと、砕け散り、不気味に暗黒に沈んでいく。低弦のリズムは、チャイコフスキーの交響曲第6番の終結の引用であり、その死の世界にトランペットによる弔歌が響く。これが1936年のソ連だったのだから。露骨に「今」を描写した上で、シヨスタコーヴィチは「否」を示す。

ラトヴィア出身のポーガの指揮では、輝かしいと人を惑わせることもあるこのコラール風旋律が、初めから鈍く、にせの高揚と感しさせる。この曲では、どんなに耳を凝らしても祈りは聴こえなかった。だが、5番や10番は異なる。

5番の第1楽章の終結部では、チェレスタが上行音型を3度弾く。これは、4番と5番の連続性を示す。4番で使われた2台のハーブも、曲

想の変化の導入や、音色を深める場で活躍する。作曲者は、初演を見送った4番を捨て去っていない。5番によって4番が存在するのだということ伝えていくかのように受け取れる。

そして、5番は新しい世界を開く。第3楽章である。4番で主調をなしたグロテスクや諧謔、ユーモアとは無縁の世界。作曲時に30歳だったシヨスタコーヴィチの内面は著しく深まり、悲しみ、孤独、喪失、うめきとされる旋律が続く。聖歌風の響きも奏割を果たすのは、やはり、チェレスタとハーブ。4番の作曲された36年に比べても、5番作曲・初演の37年は、スターリン政権下の「大テロル」による暗黒の度が増し、親しく交わったトゥハチエフスキー元帥をはじめすぐ近くにいた人たちが姿を消していった。第3楽章は、その時を生きたシヨスタコーヴィチの心そのものといえる。とりわけ最後の長調終止は、死者を思い、また光を求める祈りと受け取れる。

### 独裁者の死の直後に作曲

交響曲第10番も、その延長線上にある。5番との間には独ソ戦があり、終戦後には再び党機関から自作を厳しく批判され、交響曲第9番は演奏

が禁じられた。10番が作曲されたのは、独裁者スターリンの死から4か月後の1953年7月から10月にかけてである。共産党大会の秘密報告でスターリン批判が行われ、大テロルの実態が表に出るのは、56年。独裁政権からどこに移り行くのか。まだ判然としない段階で、シヨスタコーヴィチはこの交響曲を作曲したのだった。



名古屋フィル演奏会の前半で指揮する下野竜也 ©中川幸作



後半でシヨスタコーヴィチの10番を演奏する下野竜也指揮名古屋フィル

クラリネットの第1主題の作曲者の指示は「センプリーチエ」（素朴に）。旋律を歌いすぎないところから生まれる真実の響きは、ムソルグスキが《展覧会の絵》の終曲で、聖歌旋律に同じ指示をしていることを思い出させる。

### 弱音の金管コラール 恋人と自身の音名音型

弱音による金管コラールには、エスプレッシヴオの指示。敬虔な響きを醸す促しだろうか。こうした旋律は第4番には存在しない。だが、楽章全体は、浄化には遠い。終わりのピッコロの吹く風景は、ロシアの晩秋のように色がなく、寒々としている。

第2楽章は、荒れ狂う。下野がインタビュで語っていた通り、とりわけ中間部でまさに異様な世界となる。コントラバスは2群に分かれ、第2パートは通常のヘ音記号でなく、実にト音記号による高音の16分音符のパッセージをフォルティッシモで弾く。時代の狂気を地で行く表現だろう。

第3楽章は、シヨスタコーヴィチ特有のグロテスクな踊り。だが、そこにホルン・ソロが響くあたりから人間味が増していく。シヨスタコーヴィチの恋人の音型のホルン・ソロは、人の声。自身の音名音型D S C Hととも、「対話」が始まる。シヨスタコーヴィチは、イデオロギーと党が君臨する社会に、「個」を対置し、その尊厳を際立たせる。

第4楽章序奏部はオーボエ、フルート、ファゴットと移行行くソロの表情が深い。光に進むようにみえながら、夜鳴き鳥のような悲鳴に似た音が交錯する。主部に入ると勇壮に前に進む音楽は、やがて難破するように砕ける。そこから再びD S C H音型が立ち上がり、最後は歓呼のような明るさとなる。だが、それは、ベトーヴェン風の勝利ではない。そうではなくても、シヨスタコーヴィチをはじめ多くの市井の人々は生き、未来を思った。湧き上がる感動は、そのことへの共感だったかもしれない。